

## 国際バカロレアの言語教育に関する一考察 —国語教育とリベラルアーツ教育との関連から—

半田 淳子

### 1. はじめに

本稿は、2014年8月6日から8日までの三日間、東京学芸大学附属国際中等教育学校(TGUISS)で開催された、国際バカロレア(以下、IB)アジア太平洋地域のディプロマコース(以下、DP)のワークショップに参加した際の報告書である。筆者が参加したのは、「日本語A:文学(Japanese Language A: Literature)」で、日本の国語教育に近い領域である。今回のワークショップに参加して、更に多くの学校がIB校の認定を受けようとしていることを知った。IBプログラムは、今後、様々な意味で注目を集めるに違いない。本稿の前半では、IBプログラムの概要について、特に日本語教育と関連のあるIBの言語教育について、3日間のワークショップの成果を踏まえて報告する。また、本稿の後半では、IBを担当する教員の責務と役割について、またIBプログラムの展望についても言及する。

### 2. 研究の背景

IB機構は、インターナショナルスクールの卒業生に国際的な基準で大学入学資格を与えている。本部をスイスのジュネーブに置き、共通カリキュラムの作成やIB試験の実施、資格の授与などを行っている。日本でも1979年以降、IBの資格を持つ者で18歳に達した者は、大学入学に関して、高等学校卒業と同等以上の学力があると認められるようになった。IB機構は、国際的に大学入学資格を保障するだけでなく、「学生の柔軟な知性の育成と、国際理解教育の促進に資すること」を教育の目的としている。そのため、ここ数年の教育の国際化、グローバル人材育成の流れを受けて、国内でもIBプログラムへの関心が一段と高まっている。2014年5月23日付の『朝日新聞』で報じられたように、文部科学省(以下、文科省)はIB資格を用いた大学入試の普及を推進している。

文科省のホームページ(2014)によると、2013年9月の時点で国際バカロレアに認定されている学校(以下、IB校)の数は27校で、そのうちの大半はインターナショナルスクールであるが、学校教育法第1条に規定されている学校(以下、1条校)も含まれている。静岡県に加藤学園暁秀高等学校・中学校、東京都の玉川学園K-12・玉川大学と東京学芸大学附属国際中等教育学校、群馬県のぐんま国際アカデミー、京都府の立命館宇治中学校・高等学校、広島県のAICJ中学・高等学校、福岡県のリンデンホールスクール中高学部の7校である。それ以外にも、ここ数年、IB校の認定を受ける初等及び中等教育機関が急増しており、文科省も2018年までにはIB校の数を200校程度まで増やそうと計画している(2013年6月閣議決定)。このように、今後、IB校は国内外で確実に増え続けるものと予想される。IB校が増加すれば、当然のことながら、IBの各教科を担当する教員が必要になってくる。現在、IBプログラムの教員養成をおこなっている大学は玉川大学大学院のみで、2014年4月からIB教員の資格が取得できる「IB研究コース」を修士

課程に開設した。

本稿では、IB プログラムが普及した教育現場で、日本語あるいは国語を担当する教員に必要な知識や能力とは何かについて考察する。DP コースの選択科目の一つ「日本語 A: 文学 (Japanese Language A: Literature)」では、「文学批評に関する文学的な技法」や「文学作品を独自に批評する能力」の指導が求められているが、現行の日本語教師が文学批評を扱う機会は多くない。また、IB 教員全般に求められているのは、IB の「カリキュラムを解釈し、開発し、遂行する」能力であり、IB のカリキュラムに即した「独自教材」の開発である。更に、「多様な文化の理解と尊重の精神」を持って「より平和な世界を築くこと」や「探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を目的とした IB の理念や使命にも精通していなければならない。そのため、今後の教員養成においては、IB の教育理念や言語教育を学ぶことのできるコースの開設が不可欠である。また、日本文学に関するコースの履修も提案したい。

### 3. IB とリベラルアーツ教育

IB プログラムは、3 歳から 19 歳までの児童生徒を対象に、三つのプログラム（現在は、IB キャリア関連教育サーティフィケートが追加された）から構成されている。初等教育を意味する PYP (Primary Years Programme、3 歳～12 歳)、中等教育を意味する MYP (Middle Years Programme、11 歳～16 歳)、ディプロマ資格プログラムを意味する DP (Diploma Programme、16 歳～19 歳) の三つである。理数系と経済・歴史・国語以外の教科は、基本的に英語で授業を行うことになっている。ちなみに、先に紹介した IB 校が、この三つのプログラム全てを持っているわけではない。例えば、2014 年 9 月現在、PYP、MYP、DP の三つを実施しているのは、カナディアン・アカデミー（兵庫県）、大阪インターナショナルスクール（大阪）、K・インターナショナルスクール（東京都）の 3 校であり、いずれもインターナショナルスクールである。一方、1 条校の玉川学園は MYP と DP で、東京学芸大学附属国際中等教育学校は MYP のみで、ぐんま国際アカデミーは DP のみである。また、三つのプログラムを有している学校の生徒でも、履修の仕方には個人差があり、すべての科目を履修する生徒もいれば、幾つかの科目に限定している生徒もいる。というのも、IB の資格を取得するためには、DP の課程を修了し、統一試験に合格することが求められているからである。ICU が直接に関わりを持つのは、16 歳から 19 歳までを対象とする DP のレベルである。ICU では、既に、DP を修了し IB の最終試験に合格した学生（9 月生）や、MYP を修了し一般入試で入学した学生を積極的に受け入れている。

IB プログラムで特に重要なのは、その使命であり、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています」と述べられている。また、IB プログラムは「世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています」とも記されている。ここに述べられているように、IB の使命には、ICU の建学の精神に通じるものがあり、

本学のリベラルアーツ教育そのものであると言っても過言ではない。

更に、IBは「国際的な視野をもつ人間の育成」を目指して、特に価値を置く人間性を10の人物像として表現している。即ち、「探究する人」「知識のある人」「考える人」「コミュニケーションができる人」「信念をもつ人」「心を開く人」「思いやりのある人」「挑戦する人」「バランスのとれた人」「振り返りができる人」である。IBは、こうした資質を備えた人物こそ、「個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティーの責任ある一員となることに資する」と述べている。この記述にも、ICUの標榜する「信頼される地球市民を育む」という理念と通底するものが認められる。

#### 4. IBの言語教育

IBのカリキュラムには、PYP、MYP、DPのいずれのコースにも「言語」という科目が含まれており、これを実施することが義務づけられている。PYPで学習する6つの教科は、① Language (言語) ② Mathematics (算数) ③ Science (理科) ④ Social Studies (社会) ⑤ Arts (芸術) ⑥ Personal, Social and Physical Education (保健体育) で、どの言語で教えても良いことになっている。ただし、①から④までの教科は、基本的に学級担任が担当しなければならない。

MYPも、どの言語で指導しても良いことになっている。MYPでは、8つの教科学習が行われる。① Language A (言語A) ② Language B (言語B) ③ Humanities ④ Science ⑤ Mathematics ⑥ Arts ⑦ Physical Education ⑧ Technology で、これら8つの領域のそれぞれから生徒は最低1科目を選択しなければならない。「言語A」は、生徒が得意とする言語(いわゆる母語あるいは第1言語)で、生徒が在籍する学校の言語になっていることが多い。一方、「言語B」は外国語教育である。IBは、MYPの全学年にわたって、2言語を継続的に学習することを求めており、学習する言語には母語を含めることを奨励している。日本の1条校の場合、MYPの「言語A」は、いわゆる国語教育であり、質の高い文学作品の学習を通じて、理解力、運用能力、鑑賞力を高めることを目標としている。「言語B」は、外国語の学習を通して、批判的で優れたコミュニケーション能力の育成を目指している。「言語B」では、生徒は、マルチリテラシーを身につけ、話し言葉、書き言葉、視覚的な言葉(言葉によるビジュアル表現)を理解し、使えることが期待されている。また、「言語B」は、「基礎」から「上級」まで6つの段階に分かれ、手話や継承語、古典語も含まれている。

ところで、PYPやMYPはカリキュラムではなく、Framework(枠組み)という位置づけである。それに対して、DPはカリキュラムとしての扱いである。更に、指導用言語にも縛りがあり、IBの使用言語(英語、フランス語、スペイン語)か、日本語を含む「レベル3」の提供言語で指導することになっている。また、DPの生徒は、6つの領域から科目を選択し、必ず履修しなければならないことになっている。① Studies in Language and Literature (言語と文学) ② Language Acquisition (言語の習得) ③ Individuals and Society (個人と社会) ④ Science (理科) ⑤ Mathematics (数学) ⑥ The Arts (芸術) の6領域で、その中から3科目を2年間で学習時間が各240時間のHigher Lever (HL)で学び、残りの3科目を各150時間のStandard Level (SL)で学ぶことになっている。

言語教育に関わる領域のうち、①「言語と文学」は更に「言語 A：文学」「言語 A：言語と文学」「言語 A：文学とパフォーマンス」の 3 科目に分かれており、いずれの科目も当該言語を学問的な文脈で使用した経験のある生徒を対象にしている。DP の要件を満たすには、この 3 つのコースから 1 科目を履修することが必要である。「文学とパフォーマンス」は標準レベル (SL) のみだが、「言語 A：文学」と「言語 A：言語と文学」には標準レベルのほかに上級レベル (HL) がある。他方、②「言語の習得」は、「言語 B」と「初級外国語」の 2 科目に分かれ、いずれも外国語教育だが、「言語 B」は当該言語をある程度学んだことのある生徒が対象である。つまり、DP の場合、外国語としての日本語教育は②「言語の習得」に属するが、第 2 言語としての日本語教育や継承語としての日本語教育は①「言語と文学」の領域になるわけで、言語教育のみならず、文学教育も日本語教育に含まれることになる。

更に、DP は、上記の 6 教科のほかに、コア (核) になる 3 科目「知の理論 (TOK: Theory of Knowledge)」「課題論文 (EE: Extended Essay)」「創造性・活動・奉仕 (CAS: Creativity, Action, Service)」の履修が義務づけられている。「課題論文」とは、大学の卒業論文のようなもので、生徒は履修中の DP 科目の中から 1 科目を選択し、関心のあるトピックを定め、個人研究を進める。研究成果は、4,000 語 (日本語の場合は、8,000 字) の論文にまとめて提出する。このように、DP は、色々な意味で言語教育を重視したカリキュラムになっているのである。IB の試験は、5 月と 11 月の年に 2 回行われているが、「言語 A：言語と文学」は、5 月のみの試験であり、7 月に結果が分かる。テストはいずれの場合も論述で、原則として手書きで解答することになっている。

## 5. IB 教員の責務と役割

IB プログラムの教育は、学習者を中心に進められる。IB を担当する教員は、知識を伝達するのではなく、むしろ生徒の学習をサポートするという役割に徹することが期待されている。その一方で、IB の教員が共通に担う責務には、「科目のねらい、目標、内容、各国および各校の状況を把握する」「カリキュラム (あるいは、フレームワーク) を解釈し、開発し、遂行する」「指導の手引き+教師用参考資料+独自教材を作成する」ことの 3 点が挙げられる。なかでも「独自教材」の作成は特に重要で、他の学校が扱っているからという理由で、同じ教材を扱ったりしてはいけないことになっている。IB の場合、実に多くのことが担当教員に任されているのである。

日本の 1 条校の場合、事情は更に複雑で、文科省の学習指導要領との整合性を考えることが必要になってくる。学習指導要領に準拠した教科書に掲載されている作品を、IB プログラムの中でどのように扱っていくのかという課題も残される。そのため、国語教育の話になるが、日本の義務教育に相当する MYP までは、学習指導要領に準拠して IB のコース全体の授業を考えなければならない。DP の場合は、高校 1 年生で必修の「国語総合」の教科書を使用し、2 年次以降に IB のカリキュラムを開始することになる。ただ、高校 3 年次の 11 月の統一試験のことを考えると、それでも時間割としては相当に厳しい。DP には、IB 機構が作成した「指定作家リスト」があるので、通常の教材に教科書教材を取り上げることはできないが、記述課題や口述課題には生徒の好きな作品や「山

月記」や「舞姫」などの定番教材を扱うこともできる。

IB プログラムの言語教育は、実は文学教育でもある。IB には、「文学は、文化を代表する唯一のものである」という考え方があり、文学作品を広く深く解釈し、エッセイにまとめて発表する課題が主流である。例えば、DP の「日本語 A : 文学」は、「Works in Translation (翻訳作品)」「Detailed Study (精読学習)」「Literary Genres (ジャンル別学習)」「Options (自由選択)」の 4 つのパートに分かれ、「指定翻訳作品リスト」や「指定作家リスト」の中から、授業で取り上げたい作家や作品を担当教員が選ぶことになっている。先に、DP には標準レベル (SL) と上級レベル (HL) があると述べたが、これら 4 つのパート全体で、SL は 150 時間、HL は 240 時間の学習時間を確保する必要があるが、更にパートごとの学習時間数も細かく決められている。

また、DP では、学習時間数だけでなく、シラバスが非常に細かく規定されている。例えば、「日本語 A : 文学」の場合、SL では 10 作品、HL では 13 作品を、「指定翻訳作品リスト」や「指定作家リスト」から選択することになっている。HL であれば、「翻訳作品」が 3 作品、「精読作品」としては異なるジャンルの作品を 3 作品、「ジャンル別学習」では同じジャンルの 4 作品を学習しなければならない。また、「精読作品」には、欧米の文学的な伝統を受けて、必ず「詩歌」が含まれる。「自由選択」のみ、自由に 3 作品を選んで良いことになっている。ただし、同一パートで、同じ作家を繰り返し扱うことはできない。異なるパートであれば、同じ作家の別の作品を扱うことはできる。「指定作家リスト」は、「物語・小説」「随筆・評論」「詩歌」「戯曲」のジャンルから構成されており、「物語・小説」は夏目漱石や村上春樹などの近現代の作家が中心で、その他、『竹取物語』や『平家物語』、紫式部や上田秋成の作品なども扱うこともできる。なお、国語教育でいう「漢文」は、IB の言語教育からは除外されている。「漢文」は外国文学であって、「翻訳作品」の範疇には含まれないからである。また、作品の数え方にも、IB 独自の規定があり、例えば、芥川龍之介の「羅生門」は短編なので 1 作品とは見なされず、同じ短編の「鼻」や「芋粥」と合わせて 1 作品として扱われる。同じような理由で、詩歌であれば 400 行以上、和歌や俳句であれば 30 首 (句) 以上で 1 作品に数える。「翻訳作品」では文化的な理解や作品への独自の批評、「精読作品」では批判的な読みや言語表現の効果、テーマや人物像の分析、「ジャンル別学習」では特定のジャンルにおける表現技法について、それぞれ焦点を当てた授業が展開される。

## 6. 国語教育との連携の必要性

このように、IB の言語教育を担当する教員に求められているのは、言語能力の育成だけでなく、多様な文学テキストを精査し、選択し、授業計画を立て、実際に生徒を指導できる能力である。しかしながら、IB の言語教育や文学教育について熟知している日本語教師は少ない。また、日本語教育能力試験の出題範囲にも、日本文学は含まれていない。加えて、IB のカリキュラムには、指定された教科書や指導書の類は存在しない。担当教員は IB の教育理念を理解した上で、教材を開発し、2 年間の指導計画を作成しなければならない。文学作品であれば、一部ではなく、作品全体を読んで、課題に取り組むことになる。全てが担当教員に任されているのである。更に、IB は指導方法も独特で、教師

主導で教えるのではなく、生徒の主体的な参加が重視され、「課題論文 (EE: Extended Essay)」といった、プロジェクトワークのような課題もある。このような実情を鑑みると、IB プログラムの導入が決定すれば、当然のことながら、IB 経験のない日本語教師の間には大きな戸惑いと不安が広がるに違いない。

大迫 (2013) は、IB の日本語教育に関して、次のような展望を述べている。

これまで IB には、基本的には「英語ができる日本人」しか関わってきていません。日本語及び日本語による文学の指導においても「英語ができる日本語教師」の方々が取り組んできてくださいました。

しかし、これからは英語が不得手でも、日本語で「文学」を専門的に学んできた方や国語教育において優れた実績を持った方などが、そこに加わっていくことにより、IB の日本語教育は、必ず前進していくはずです。

根津ほか (2009) のように、これまでも日本語教育と国語教育の連携が模索されてきたが、IB の言語教育はそれが最も可能であり必要な分野であると言える。ICU の日本語教員養成プログラムは、言語教育メジャーという観点から、既に連携に取り組んできた。ICU の学生が日本語教員養成プログラムの修了書を取得するためには、24 単位の必修科目のほかに、21 単位の選択科目を履修する必要がある、学生は全学的な約 130 科目の中から関連科目を選択できるようになっている。開講されている科目の中には、「日本文学史」や「日本文学概論」などの日本文学に関連する科目が 13 科目含まれている。これらの科目は、国語の教職課程を履修している学生にとっては、教科に関連する科目であり、必修あるいは選択必修科目となっている。そのため、ICU では、国語の教員免許と、日本語教師の修了書の両方 (学生によっては、英語の教員免許も) を同時に取得することが可能である。ただし、教材開発や作品の扱い方、指導方法などの面では、IB の言語教育は従来の国語教育とは大きく異なっている点も忘れてはならない。今後は、IB 校で現在教えている教員を中心としたネットワークを構築し、IB の言語教育を指導する教員には、ワークショップのような特別な研修が継続的に必要である。

## 7. おわりに

2018 年までに、IB 校の認定を受ける学校が増加することを考えると、日本語教育と国語教育の連携は不可欠である。IB 機構は、教員自身の継続した研鑽を奨励している。そのための研修会も、毎年、開催されている。つまり、IB プログラムを受けている生徒だけでなく、担当教員も、文化的背景の異なる人々の異なる価値観の意味を理解し、人間として成長し続けることが期待されているのである。IB の理念や使命には、ICU のリベラルアーツ教育と共通するものが多数含まれている。つまり、ICU のリベラルアーツ教育を受けた卒業生には、IB 教員としての基本的な資質が備わっていると見て良い。ICU は、今後、IB の教員養成にも尽力し、リーダーシップを発揮すべきであろう。

## 参考文献

大迫弘和 (2013) 『国際バカロレア入門—融合による教育のイノベーション』学芸みらい社

国際バカロレア機構 (2014) *Language and learning in IB programmes*

田口雅子 (2007) 『国際バカロレア 世界トップ教育への切符』松柏社

玉川大学 (2014) 「IB 教員ならびに IB 研究者としての資格が取得できる「IB 研究コース」を日本で初めて大学院修士課程に開設 (平成 26 年 4 月スタート)」

URL [http://www.tamagawa.jp/graduate/news/detail\\_6667.html](http://www.tamagawa.jp/graduate/news/detail_6667.html) (2014 年 11 月 19 日)

根津真知子・半田淳子・平田泉 (2009) 「言語教育の普遍性と個別性—日本語教育と国語教育—」『ICU 日本語教育研究』 pp. 49-58.

文部科学省 (2014) 「国際バカロレアとは」

URL [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1307998.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm) (2014 年 11 月 19 日)